

およそ人を用いることなくして敵を計略しようとするのは、最も智にあらざることである。その人のことを熟知してからこれを用いるということは、神明天人を得て計略するに等しいものである。そうであれば、聖にして智なる將軍には、六種類の忍び（スパイ）があると云われる。いわゆる因口間（いんこうしのび）、内良間、反徳間、天上、死良、奪口がこれである。因口間というのは、郷人の中で必ず一人だけと言葉を通わせる。その人物が誰であるかは機密とされ、神も知らないほどである。内良間とは、身近の家臣や親族をもつて我が忍びとして備えておくものである。これをどのようにして用いるかについては、極めて奥深いものがある。反徳間とは、敵が忍びを用いる場所において用いる忍びである。頭々の忍び（二重スパイ）というものは、その道が極めて奥深いものである。この忍びが理に適（かな）っている時には、敵をして家臣の如くならしめる。天上とは、敵側の情報網を経由して敵に影響を与える方法である。その事は一つではない。死良とは、我が謀略をもつて単独で敵に止めを刺すことである。決断して一時に勝ちを執るべきものであり、再挙は無い。それにより一挙にして天下が大いに定まるのである。奪口とは、天下の人をして忍びの使いとなすものである。その情報は秘密度が高く、広範囲にわたり、多大であるのは、ここに記し尽くすことができないほどである。およそ大将の心術や戦の微妙は、忍びに及ぶものはない。人材を得て忍びを十分に活用できるときは、実をもつて敵を知り、虚をもつて敵を知り、天地さえも知り尽くす。ましてや、人の心を知れないことがあるか。たとえば優れた医者の前には薬とならない草木が無く、凡庸な医者の前には良薬もかえって毒薬と成るようなものである。物類に応じて千万端に忍びを發するならば、どうして先に述べた六種類だけで済むだろうか。さらに様々な忍びがあるだろう。そうであれば、忍びがいる所には音も無く、臭いも無いのだが、聖智で無ければこのようなことを十分に為すのは難しい。利巧でなければその時を得ることが難しい。忍びの中に忍びあり。口伝。